博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　　三宅　登之　　印

学位申請者　王　棟（　おう　とう　）

論　文　名　現代中国語における進行・持続の事象を表す“正 VP”“在 VP”“正在 VP”に関する研究

【審査の結果】

王棟氏から提出された，博士学位請求論文「現代中国語における進行・持続の事象を表す“正 VP”“在 VP”“正在 VP”に関する研究」について，論文審査と口述による最終試験の結果，審査委員会は全員一致で，王棟氏に博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。

2024 年 3 月 5 日の事前審査を踏まえ，公開審査（最終試験）は，2024 年 8 月 26 日 15 時より，約 2 時間にわたって，対面で実施された。最初に王棟氏より提出論文の概要について説明があり，その後，各審査委員が講評を行なうとともに王棟氏との間で質疑応答を行なった。

審査委員会は，三宅登之が主査をつとめ，本学川村大教授，加藤晴子教授，学外からお招きした下地早智子教授（神戸市外国語大学），町田茂准教授（山梨大学）を副査とする 5 名で構成された。

【論文の概要】

本論文は，現代中国語において，進行や持続を表すとされる“正”“在”“正在”についての研究である。中国語において，動作の進行や状態の持続を表す手段の一つとして，動詞性成分や形容詞性成分の前に“正”“在”“正在”を置くという形式がある。“正”“在”“正在”はそれぞれ後ろに述詞性成分（VP＝動詞性成分と形容詞性成分を含む）を伴い，動作や状態の進行や持続を表す働きを持つとされる。“正吃”“在吃”“正在吃”（いずれも「食べている」），“正伤心”“在伤心”“正在伤心”（いずれも「悲しんでいる」）などがそれであるが，三者が全く同等という訳ではない。本論文は，コーパスから収集した大量の言語データの分析を通じて，三者の VP との組み合わせに見られる異同を整理した上で（第三章），その本質的な違いを認知モデルの違いに還元し（第四章），三者の関係を明らかにしようとした（第五章）ものである。更に，その前提となる進行・持続という

概念そのものの解明に切り込んでいる（第六章）。その結果，以下の見解に達している。①“正”“在”“正在”のうち，“正”は最も多くの類型の VP と共起可能であり，その際表す意味にも幅があるが，基本的な意味として「参照点と対象との一致性」にまとめられる。②“正”と“在”の違いは「参照点依存型 vs 参照点独立型」の違いに還元できる。③“正在”の性質は，“正”“在”のいずれとも異なり，また両者の性質を合わせたものとも異なる。④動結構造に進行・持続の意味が認められ，“正在”と共起しうるか否かの判断には「進展の勾配」の概念が有効である。

本論文の構成は以下の通りである。

第一章「序説」では，本論文が注目する言語現象について概略を示し，本論文が解決すべき課題を挙げ，言語データに関する説明を行なっている。

第二章「“正”“在”“正在”の異同に関する先行研究」では，“正”“在”“正在”の違いに関する先行研究を概観した上で，それらの成果と限界を明らかにし，本論文の課題を明確にしている。先行研究においては“正”“在”“正在”三者の異同の説明に際して，VP との共起関係が軽視されてきたこと，できるだけ多くの言語現象を統一的に説明できるようなモデルが考えられてこなかったこと，進行・持続の本質に迫る試みがされてこなかったこと，などを限界として挙げ，これらの点を本研究の課題とするとしている。

第三章「“正/在/正在 VP”構文の事象類型の異同」では，“正”“在”“正在”の異同について，先行研究では，それぞれ別々の言語現象に基づいて，いわば，異なる観点から違いを説明していたのに対し，それらを一旦バラバラに解体し，同等と考えられる現象ごとに，先行研究を横断的にまとめ直すことにより，明快な形で整理し直している。また，そこにコーパスからの大量の言語データの分析をつけ加え，得られた 17 の類型の VP 別に，“正”“在”“正在”との共起関係と意味とを考察する。それにより“正 VP”における“正”を 5 つに分類した上で，それらを認知ドメインのレベルで時間的一致，認識的一致，空間的一致の 3 つにまとめ，より上位のレベルでは参照点と対象との一致として一括するという，階層性を持たせた説明をしている。更に，“正”“在”“正在”と 17 の類型の VP との共起可能性およびそれらによって表される事象の性質を，簡潔な図にまとめている。

第四章「「独立」の“在”と「依存」の“正”との対立」では，“正”と“在”の異同に着目している。ここでもまずは，各先行研究で取り上げられている言語現象を詳細に記述・整理をした上で，その異同を統一的に説明できるモデルとして，「参照点依存型」と「参照点独立型」を提唱する。“正”と“在”との根源的な違いは，“正”は参照点事象を経由して対象事象を把握する必要がある「参照点依存型」である一方，“在”は対象事象を直接把握することができる「参照点独立型」であるところに求められる。そのため“正”は，ある事象を単独で述べることになる場合には使いにくいが，“在”はそのような制約とは無関係であり，その違いが，単文での振る舞いの違い，複文や連体修飾節での位

置づけの違い，“是”との共起の違い，などの，さまざまな言語現象として現れていることを主張する。

第五章「複合表現“正在”の性質」では，“正在”と“正”“在”の関係を論じている。先行研究を，①“正在”＝“正”＋“在”， ②“正在”≒“正”，③“正在”≒“在”の3つの立場にまとめた上で，“正在”を一語として認めるべきか，という点と“正”の性質と“在”“正在”の性質はどのような関係なのかという点を考察している。その結果，“正在”は“正”と“在”がそれぞれ他の多くの成分と交換可能なこと，また，“正”と“在”間に他の成分を挿入できることから，一語ではなく，“正”と“在”の共起と見なすべきであるとしている。しかし，第三章と第四章でまとめた“正”と“在”の異同を示す言語現象と合わせて考察すると，“正在”の性質は，“正”と“在”のどちらに近いとも言えず（つまり②でも③でもない），また，両者の性質を引き継ぐとも言えず（つまり①ではない），一つの複合的表現として認識すべきであると結論づけている。

第六章「“正在＋動結”の成立条件から見る「進行・持続」という事象認識」では，“正在”と動詞＋結果補語形式との共起の容認度の分析を通じて，進行・持続という事象認識の成立条件を考察する。その結果，従来，持続的か瞬間的かという二項対立で捉えられてきた進行・持続という認識は，幅のある【時間の長短】に加え，「事物の部分的変化」または「状態の程度的変化」のいずれかまたは両方による【状態の違い】をも合わせた，二次元的認識によるものであることを主張している。「変化した量」を「変化に要した時間」で割ることで求められる「進展の勾配」を想定した場合，これがある一定の範囲に収まっている場合に，進行・持続が認識されるとする。“（交通灯）变红”（（信号が）赤になる）のように変化が短時間で起こる場合は，「進展の勾配」が垂直に近くなり，瞬間的と認識され，進行・持続とは認識されない一方，“穿旧”（着古す）のように変化が長時間かけて起こる場合は，「進展の勾配」が水平に近くなり，やはり進行・持続とは認識されにくいとする。これにより，従来の研究が陥りがちであった，「進行・持続マーカーと共起するから持続的事象を表す」「持続的事象を表すから進行・持続マーカーと共起できる」といった循環論からの脱却を目指す。

第七章「結論」では，本論文の主張がまとめられ，その意義と今後の課題が述べられている。

【審査の概要と評価】

本論文に対して高い評価を与えられる点として，審査委員から以下のような点が挙げられた。

(1)コーパスから，多くの言語データを収集し分析した上で記述を行なった力作である。

(2)関連する先行研究の把握は概ね充分である。錯綜しがちな従来の議論に対して，各論述を丁寧に読み込み，横断的に整理し直すことによって，“正”“在”“正在”三者の

違いを明確な形で示すことに成功している。特に，これまで“正”“在”“正在”のみが議論の対象とされてきたことを問題視し，“正 VP”“在 VP”“正在 VP”の違いを観察すべきとした点は重要な指摘である。

(3)“正”“在”“正在”と VP との共起関係およびそれらが表す意味のまとめを踏まえ，“正”の基本義とそこからの枝分かれの様子，および，“正”“在”“正在”と共起しうる VP を，それらが表す事象の性質とともに図にまとめているが，これらは中国語学の今後の研究の深まりに貢献するだけでなく，中国語教育の面からも有益である。

(4)“正”と“在”の違いを「参照点依存型 vs 参照点独立型」の違いとした点は，これまで明確には示されてこなかった観点であり，多くの現象を説明する説得力を持つ。

以上のような高い評価を受ける一方で，以下のような疑問点や課題も指摘された。

(1)“正”と“在”は，統語的位置が異なり，また，“正”には否定形がないなどの点から，範列的なものとして比較可能かどうかについて，疑念がある。そのことにより自覚的であるべきであった。

(2)“正”に進行・持続を表す機能を認めるとした点は，もう少し慎重に検討すべきであった。一つには，“正 VP”が表す様々な意味は，“正”に起因するのか VP に起因するのか，が明確になっていない。“V 着”や形容詞など，それ自身持続性を持つ VP に前接する場合，“正”は何をしているのかが検討されるべきである。もう一つ，本論文で取り上げられた言語現象のいくつかは，“正”が進行や持続を表さないことを示唆しているようである。様々な要因を視野に，更なる検討が求められる。

(3)“正”が表す複数の意味のうち，どれがプロトタイプであるのかの検討，および，それぞれの使用頻度や歴史的発展の経緯の調査などが，今後求められる。

(4)第六章は，作例による検証が多くなっており，例文の適格性判断の客観性が充分に担保されていない。また，ここで挙げられた例を更に検討すると，進行・持続の認識の成立には，動作によって生じる結果について，その実現が，始めから目指されているかどうかも関わるのではないか。

(5)いくつかの用語の使用に曖昧な点があり，また，細かな字句の誤りがかなり見られ，そのうちのいくつかは，内容の理解に影響するような誤りである。

最終試験では，以上のような疑問点や課題も示されたが，王棟氏は指摘された疑問点や課題に真摯に応答し，本論文の問題点や課題について充分自覚していることが確認できた。また，審査において指摘された疑問点や要望は，本論文の成果や意義を高く評価した上で，今後の更なる研究の進展・深まりへの期待を示したものであり，本論文の学術的価値を否定するものでないことは，審査委員の共通理解である。

以上を踏まえ，審査委員会は全員一致で，学位申請者の博士論文および最終試験での応答が合格に足る内容であると判断し，氏に博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。